英字新聞の現状と方向性について

英新を告発する会(準)

現在、我が英字新聞内に存在する矛盾というものを単に一つのサークル内でのみしか見ずして問題解決をはかろうとし、なんら大衆的に普遍化せずして、つまり同じ様な矛盾を持った他団体というものを対象として緊張関係を作っていかなかった。内在的な面と同時に外在的な面の矛盾を考えていかなかったという点において、全く不十分な討論経過しか踏まえずして、単に外形のみを変えてきただけで、毎日同じ事をくり返し、未だ具体的、本質的な運動を展開できていないということを自己批判するなかで、再度、我がサークルの総括をするなかで、他の諸団体と緊張関係を造っていかないかぎり、現在の我がサークルの状態を打破できないことを確認していきたい。

過去のサークル活動の総括をふまえると、最初から、慣習や意識をもたらすために、サークル内を三つのセクションに分けることによって、最初、一年の入部した時より、ほとんど何ら主体性を持とうとしなかった部員に、上級生が、何ら自分達の問題を提起せずして、その場のいきあたりばったりに、無意識の内に半強制的に、セクションを決めさせることによって、個々のセクションに関わる部員が、そのセクションの概念にしばられてしまい「私はこのセクションに関係のあること以外は、一切関係がない」といった他セクションに無関心な状態をつくり出してしまい、又、年五回発行される新聞によって、主体的内容を持つ記事をつくれないままに、なんでも興味本位に、単に新聞に間にあうために記事を出せばよい」といった現象が起きてきた。そういった状況下において出た新聞の記事内容において、その記事を書いた部員を追及しても、当然としても、全く主体性と責任の欠落した答しか返ってこなかった。そういった日常性への埋没によって我がサークル活動の低迷化という現象が現われたと思う。こういったことを把えかえすなら、新聞発行そのものを目的化し、記事内容に対する責任性を一切回避してしまうという、無意識のうちの自己を、EPSに自分が存在している以上、EPS活動、(つまり、英字新聞会の特殊性としてある新聞発行というものを単に、目的物とするのでなく、自己の主体性構築の一環として、結果として位置づけることによって、広い意味において、対社会を追求していくサークルである)を基本として、自己と生活環境の異なる他のサークル員との対立関係を持つあらゆるものに対して普遍化していかなければならないだろう。そこで我々としては、内在的なものとして、そういったセクションによって固定化されてしまった自己の意識を開目させるためにも、セクションを撤廃して、少しでも融通のきく、実際に、意欲的に自分の肉体によって感じるために運動を担って(いく自主講座的なものを設定しようと試ている、同時に外在的な物として他のサークルとの積極的な対話として連絡会議、学館会議があるだろうし又、サークルの存在性を考えるなら、対社会、学校と言った関係で明確にしていかなければならないと思う。こういったことを踏まえつつ、現在の大新斗争を考えていくと、まず始めに、これまでの我がサークルにおいて、ある意において、言えたことであるが、「明大新聞というものが「反権力精神、野党精神をもって学園のオピニオンリーダー」としてあると言ってきたにもかかわらず、理事会やOBは、自主規制やetcによって、大学権力の補完物として、学内の秩序化、管理化の役割を貫徹していき、内であらゆる懐柔と、批判的な者には、他の何ら自己存在を認識していない者を利用し、恫喝と分断をもって葬り去ろうとした。そういった中において、全く没主体的客観主義者は、自ら甘んじ正当化することを余儀なくされてきた。こういったものとして全くの低迷状態が存在した。以上のような状態から、彼ら編集員は、新聞学会内における変革をくりかえし、大新が学校当局の秩序化、管理化の一環であったことを明確化することによって、斗争を発展させてきた訳だが、以上のことを踏まえるなら、現在の我々のサークルが彼らの去年の状態とほとんど同じであることを認めねばならないだろうし、これだけでも今、自分達が直面している矛盾の中で、大新斗争と根本的に関っていかなければならない。又、現在の我々の意識と彼らの意識との緊張関係において、いかにして我々が自己を解体し、自己およびサークル存在を明確化し、自己の主体性を構築していけるかという点においても、共斗を組んで、具体的運動を展開していかないかぎり新聞に対する自己の姿勢が明確化されえないであろう!